

## 入選

### 心をつなぐ水

私が初めてわき水を訪れたのは、小学五年の夏休みで、県内スタンプラリーの目標地点の一つであった、いちち川延命地藏尊でした。いちち川は小説「蛍川」の舞台となった富山文学ゆかりの地でもあります。川の上流では数十年に一度、無数の蛍が舞うと伝えられています。その光景は物語の中だけではなく、本当にあったのかもしれないと、今でも思っています。

早起きをした夏の日、祖父母も一緒に、車で富山市へ向かいました。当時、母は健診で異常が見つかり、再検査の結果を待つ不安な日々を過ごしていました。家族みんなが、言葉にできない不安を抱えていたのです。名水パンフレットには、「万病にきく水」として知られ、県内外から多くの人が集まるれい水場だと書いてありました。順番を待ち、私はひしやくで水をすくい、一気に飲みほしました。とても冷たく、いつもの水とは違う不思議な感じがしました。隣では母が汗をにじませながら、ゆっくり水を口に運んでいました。

「清水を頂いたからもう大丈夫、みんな、心配しなくて良いよ。」

そう言って、母はにこりと笑いました。

止まることなく流れ続けるその水は、このときから私にとってとても大切な存在になった気がしました。そして、何十年もかけて山でろ過されたそのわき水は、私の不安や願いを受け止めてくれたようにも感じました。私は水くみ場の横に立つお地藏様に手を合わせ、母の健康と祖父母の長じゆをお祈りしました。

「長いことお参りしとったね。」

と家族に言われると、胸がいっぱいになり涙がこぼれそうになりました。

この水くみ場は、多くの人が訪れる場所です。地域の方々によるそうじや草取りなどの取り組みによって守られていることを知りまし

高岡市立牧野中学校 一年 山本 さくら

た。その温かさが、長年にわたり名水を支えているのです。また、県内には名水百選のわき水が八か所もあり、全国でも最多、どの水環境にも歴史や言い伝えが存在します。皆はその由来を信じて水を求めに来るのだと私は思います。

あの日飲んだわき水は、万病を治す特別な水ではなかったかもしれませんが。しかし、家族の不安をやわらげ、前を向く力を確かに与えてくれました。今でも、恵みの水に感謝しながら、家族と共にその場所にしばしば足を運びます。

人々の温かい手と祈りによって守られてきた水だからこそ、古き時代から今まで多くの人の心を支え、したわれ続けているのだと思います。私はこの体験を通して、水は命をうるおすだけでなく、人の思いをつなぎ、未来へと静かに受け渡していく存在なのだと学びました。これからも普段の生活の中で水を大切に使うことを心がけると同時に、水くみ場を守る地域の人々の思いにも目を向けていきたいです。